



在宅新聞製作を支えるもの

船上、港湾、造船所、工場などの現場で業務を続けられている皆様に心から敬意を表したい。また、海事業界でもオフィスワークを中心に在宅勤務が広がっているが、慣れない業務環境下で職務を全うされている皆様にエールを送りたい。

◆日刊海事プレスを作成するわれわれ海事事業部も現在、スタッフの健康を守りつつ新聞の発行を継続するために在宅勤務体制をとっている。社内で最低限やらなければならない業務のために編集長など管理職1~2人が交代で出社しているが、それ以外の記者と編集スタッフ全員が、在宅で取材をし、記事を執筆して、新聞の編集を行っている。ただし一足飛びに現在の体制になったわけではなく、比較的早い時期からまず時差出勤を開始し、その後2チームに分けての交互出勤、管理職のみの交互出勤と段階的に移行していった。そのお陰で大きな混乱もなく新聞製作業務を継続できている。

◆われわれはけっして複雑な商品をつくっているわ

けではないので、リモートワークと言っても、これまでオフィスに集まって肉声とメールで行っていたコミュニケーションや原稿のやりとりを、電話とメールに切り替えただけ。BCPも、一般的に行われている感染対策をとりつつ、スタッフに感染者が出て事務所が閉鎖された場合や、働けないスタッフが出てきた場合のバックアップ体制をつくっておくというシンプルなものだ。ただ、これを時間的制約のある日刊紙の製作でやろうとするとなかなか大変で、その体制を編集チームが頑張ってつくった。

◆記者の仕事そのものは、平時も外出先から記事を送ることが多く、国内外の出張も多いのでそういう意味ではリモートワークには慣れている。それでも、在宅勤務が長期化すれば物心両面で負担が積み上がってくるし、メールや電話だけでは社内コミュニケーションにもずれが生じてくる。前者については、会社が在宅勤務で発生する実費とは別に特別手当を支給するなどの対応を行い、後者は多くの会社のようにウェブ会議システムを活用するなどして補っている。

◆新聞の発行を続けることができているのは、何よりも、在宅でも変わらず熱心に読んでくださる読者の皆様と、この大変な状況の中で電話などで取材に協力してくださる業界の皆様のお陰だ。そのことを肝に銘じながら、情報をお伝えすることで今も社会を支えている海事・物量業界が新型コロナウイルスを乗り越えるお役に少しでも立ちたい。

(深澤義仁)

LOGBOOK

1 新型コロナウイルスがクルーズ客船で感染拡大したことを受けて、日本クルーズ&フェリー学会は船内で空気感染する場合などへの防止対策で勉強会を開催して提言をまとめた。勉強会では、造船技術者から客船の空調システムが2010年を境に独立空調に切り替わったことが説明されるなど、**梅田直哉**会長（大阪大学教授）は「知らなかったこともあり、いろんな意見が出されて有意義でした」と振り返った。「クルーズ業界は厳しい環境に置かれていますが、提言を活用して船の安全性向上につなげて業界の回復に役立ててほしい」と期待。

2 日本郵船は新型コロナウイルス感染防止対策で2月末から在宅勤務を開始して徐々に拡大し、8日から原則完全在宅勤務に移行した。「どうしても出社しなければならない場合を除いて、私もグループ員もほぼ完全に在宅勤務です」という**太田千秋**製鉄原料グループ長は、「われわれにとっては慣れない環境でストレスもたまりますが、この状況を唯一喜んでくれる者がいます」と語った。誰かを尋ねると「わが家の犬です」という答え。「平日もかまってくれる相手がいるので、人間の事情はお構いなしで犬は大喜びしていますよ」というなんとまあっこりするお話を聞いた。

3 新型コロナウイルス対策として、各社が事業継続に向けた措置をとっている。在宅勤務が長期化する中、社員の労働環境の整備・改善も課題の1つ。NAPAジャパンの**水谷直樹**社長によると、NAPAは「チャットツールなどを駆使して通常業務を行いつつ、同僚同士で楽しく仕事ができるように全社でさまざまな工夫をしています」。中にはリモートで演奏を披露する人も。在宅勤務が1カ月を超えたNAPAジャパン社員も「毎週金曜日午後のティー・チャット（お茶の時間）をリモートに切り替えて実施しています」。趣向を凝らし、難局に立ち向かっている。